震災を忘れないために

平成23年3月11日。私は当時，小学4年生でした。私はこの時，あんな恐怖がおとずれるとは，思ってもみませんでした。時計の針が，午後2時46分を指した時，突然ゴゴゴッ・・・という低い音が耳に入ってきたのです。「何だろう」と思った瞬間，教室中が激しいゆれにおそわれました。棚から落ちる本やノートなどが，教室の中でどんどんぐちゃぐちゃになっていきました。その後，けたたましい音のサイレンが鳴り，「大津波警報。早く海から離れて下さい。」との放送が町中に響いていました。「・・・大津波？」私はその時，津波に対してあまり実感がありませんでした。でも，私が見た津波は，私の想像をはるか超えた，とても恐ろしいものでした。津波が車を，木を，町をのみこんでいく・・・！

海の水が引いた後，変わり果てた町並みが私の目にとびこんできました。たった数分前まで見ていたはずの建物が，木が，町並みが，ないのです。でもそれはまぎれもなく，私たちが住んでいた故郷でした。あの地震，あの津波，あの恐怖。私たちの町は，一瞬にして壊れてしまったのです。でも，震災は何もかも奪っていってしまったのでしょうか。いいえ，違います。震災は，私たちに生きる知恵と，人々のありがたみと温かさを教えてくれました。

震災が起こる前までは，私は自然災害をまるで他人事のように思っていました。「どうせここは大丈夫。津波なんて，そんなに高い波が来るものじゃないだろう。」と。そのうえ，どこかで災害が起こっても「かわいそうに」くらいにしか思っていませんでした。でも，震災を機に，その考えはまちがっていたことに気づかされました。さらに，1か月以上の水，電気のない生活で，あらためて普段の生活のありがたみを感じました。

町・心の復興を進めるためには，みんなで手を取り合い協力していくべきだと思います。例えば，地域全体で防災意識を高めるためのイベントを行ったり，防災マップを配布したり，学校行事に地域の方を招いて交流をしたり，自分が役に立てることを積極的に行っていきたいと思います。私は，必ず気仙沼の復興を実現させてみせます。私たちの故郷が，とてもすてきで温かい町に戻るのを信じて。

（2014年3月　宮城県気仙沼市立学校長会・気仙沼市教育委員会・宮城教育大学発行　『被災から前進するために　第３集』より）

（写真提供:東日本大震災文庫／東日本大震災アーカイブ宮城）

津波の被害を受けた町（気仙沼市）